

コーパス言語学入門

英語科 浅見道明

1. はじめに

今年度は3年生の選択科目である英語ライティングを担当し、生徒にほぼ毎時間あるテーマでB5用紙1枚程度のエッセイを書かせた。そのエッセイをアメリカ人のALTが添削し、私が添削する2重のチェックを実施した。

ある時、生徒が不定詞の否定形を An increasing number of women are choosing to marry later or not to marry at all.と書いてきたのを、ALTは(1) to not marryと訂正していた。我々は、Native Speakerの言うことは何でもそれが正しい英語であると考えてしまう傾向があるが、ALTでもアメリカやイギリスの地方の出身で、そこでしか使わない方言を話したり書いたりするかもしれない。私は生徒に何かの間違いではないかと言ったが、同僚からそういう表現を聞いたことがあると言われて調べてみることにした。

また、別のエッセイで、生徒が I can't agree to the idea. と書いてきたのを、ALTが(2) agree with the ideaと訂正してきた。我々は agree with+人、agree to+事柄と教えているのに、全く逆の訂正であった。これについても区別がどうもはっきりしないので調べてみることにした。

『ロイヤル英文法』(宮川他1988) [旺文社] では(1)について、

「not (to) doのように、否定語を不定詞の直前につけて表す」という記述があった。

また(2)について、

He quite agree with me on that point.

I quite agree with you.

Neither of my parents agrees to my marriage. という例文があるだけであった。

『英文法解説』(江川1991) [金子書房] では(1)について、否定についての記述はなく、He listened attentively in order not to miss a single word. という例文があった。

(2)については、準動詞の章の不定詞だけを目的語とする動詞(3)賛成・援助・約束という項目の中に、

We agreed to go skiing. という例文があり、

前置詞の章の with (3) 調和・一致の項目の中に、

I agree with you on that point. Cf. He agreed to the idea immediately.

という例文があった。

『*Practical English Usage*』(Michael Swan 1995) [Oxford University Press] では、(1)について、infinitives (2) : forms の項目の中の negative forms に、Negative infinitives are normally made by putting not before the infinitive. という記述があり、

Try not to be late. (NOT Try to not be late) の例文があった。

(2)について、prepositions (2) : after particular words and expressions という項目に agree with a person, opinion or policy, agree to a suggestion という記述と

I entirely agree with you.

He left the firm because he didn't agree with their sales policy.

I'll agree to your suggestion if you lower the price. という例文があった。それでも明確な区別がわからなかった。そこで、アメリカ英語の誤用法ではないかと考えた。しかし、何としても確信が持たないのでコーパスを利用して調べてみることにした。

2. コーパスとは

コーパス (corpus, 複数形 corpora) とはコンピュータで処理できる電子化されたテキストデータのこと、コンコーダンスプログラムを使ってキーワードを入力すると、そのコーパスに登録されたその語を含む文を抽出し、図1のように並べてくれる。http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/tukamoto/ (日本大学文理学部 英文学科 塚本) でコンコーダンスプログラム KWIC Concordance for Windows が無料でダウンロードできる。現在では、保有数1億語といわれる The British National Corpus と保有数3億語を越えたといわれる世界最大の The Bank of English が有名である。

The Bank of English は利用するのは有料だが、サンプルとして無料で50例まで提供してくれる。そこで、上述の to not do について The Bank of English のサンプルで調べてみることにした。The Bank of English は <http://titania.cobuild.collins.co.uk/> から入ることができる。

また、最近発売になった COBUILD on CD-ROM は辞書の他に The Bank of English からの約500万語の簡易コーパスが含まれており、これを利用して(2)の agree with と agree to の使い方を調べてみることにした。この2つのコーパスは検索プログラムが付いており、コンコーダンスプログラムをインストールする必要はない。

3. 調査(1)

(1)の不定詞の否定形 to not do について The Bank of English で調べてみた。まず、コーパスのうちイギリスの文語から to not をキーにして調べてみると、図1のように、17例が抽出された。しかし、不定詞の否定形で to not do に該当するものは、第15例の The key is to not make discussion of drugs a big deal but だけであった。また、アメリカの文語から調べてみると、図2のように、同じく17例

が抽出され、8例が to not do に該当した。つまり、不定詞の否定形 not to do が to not do とも使われるのはアメリカ英語ということになる。サンプルの 17例から 8例も現れたのだからアメリカではかなり使われているのではないかと想像できる。この結果を生徒に示したら生徒はこの ALT の不定詞の使い方に納得した。

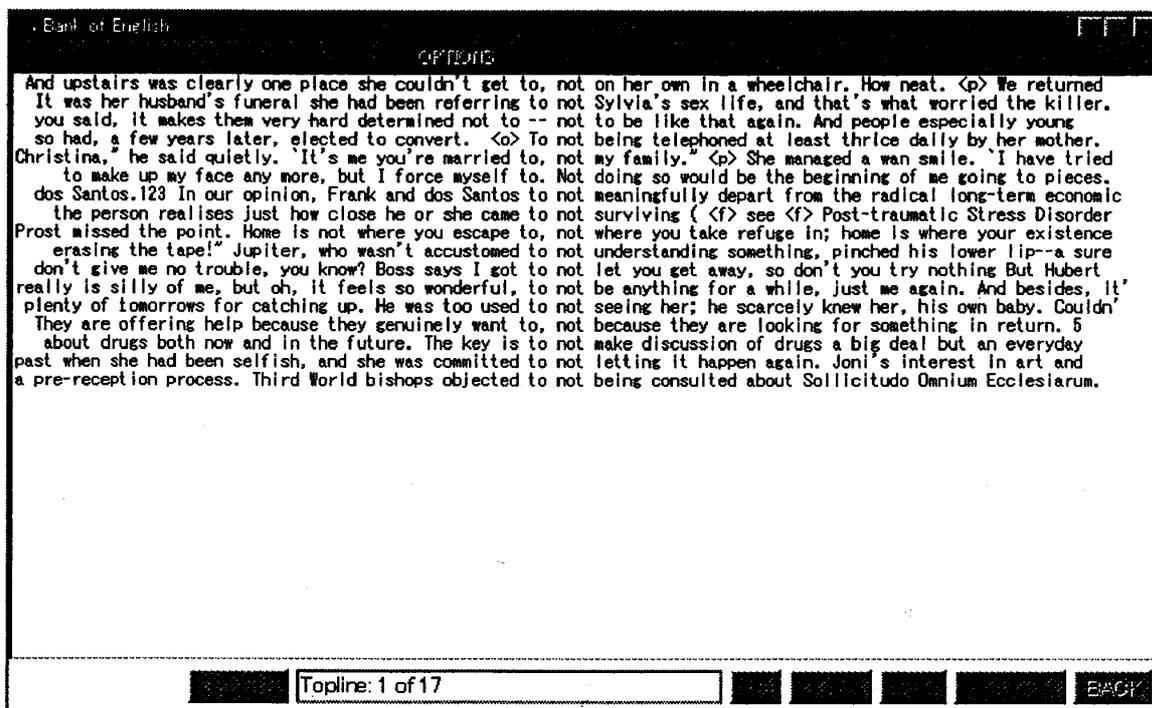


図 1 UK BOOKS

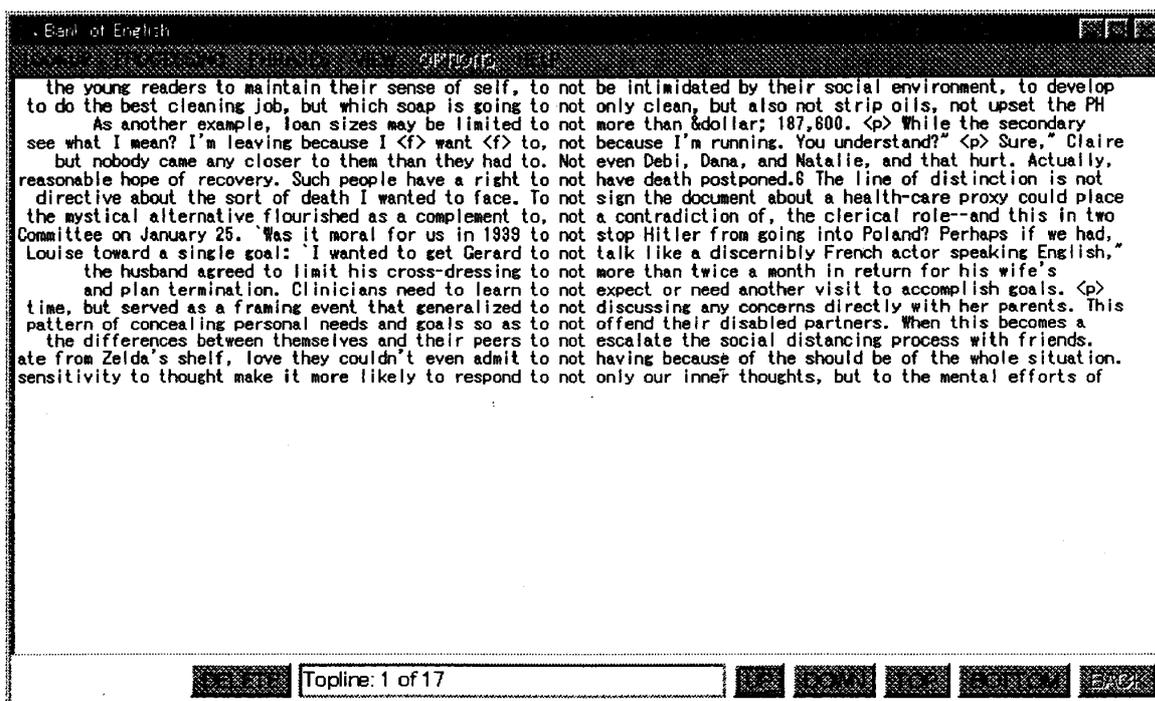


図 2 US BOOKS

4. 調査(2)

(2)の agree with と agree to の使い分けを調べるにはある程度多くのサンプルが必要ではないかと考え、COBUILD on CD-ROM の The Bank of English からの簡易コーパスで調べてみることにした。

まず、agree with で検索してみると、図 3 のように、130 例が現れた。

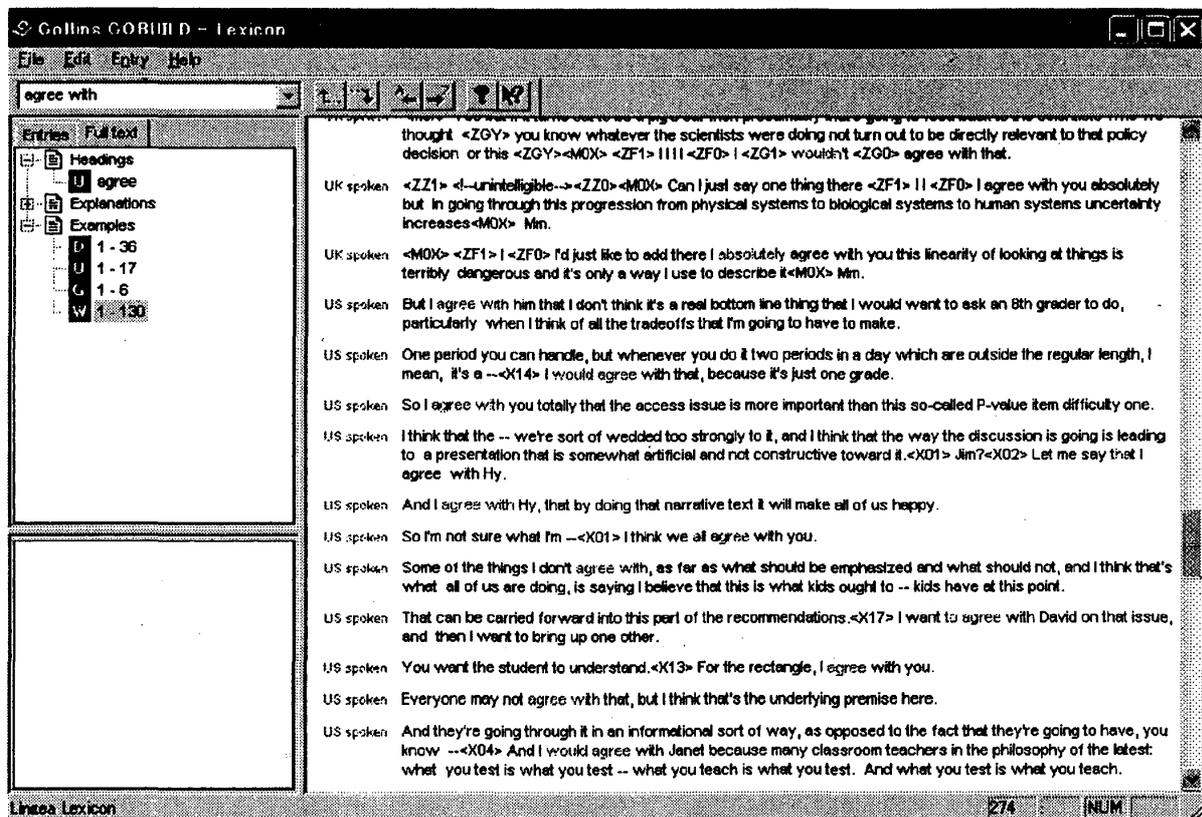


図 3

内訳を見ると、agree with に続くものは人とそれ以外の事柄で区別できるようであった。

英文語では、人が続く例が 22 例、事柄が続く例が 13 例あった。事柄の内容を挙げておくと、what 節 2, this, that 2, anything, assessment, talking, the first of those sentences, this option, your comments, Dyson's view, the way であった。

米文語では、人が続く例が 8 例、事柄が続く例が 7 例あった。内容は、Sobel's analysis, this line, it, this reasoning, this approach, much of appraisal, the remark であった。

英口語では、人が続く例が 15 例、事柄が続く例が 17 例あった。内容は、what 節 3, that 9, it 2, taking, the unions, his point of view, your will であった。

米口語では、人が続く例が 26 例、事柄が続く例が 21 例あった。内容は、what 節 2, that 9, some of the things, it, listing, various points, that thinking, his answer, that judgment, the characterization, his position, the premise であった。

次に、agree to で検索してみると、図 4 のように、86 例現れた。

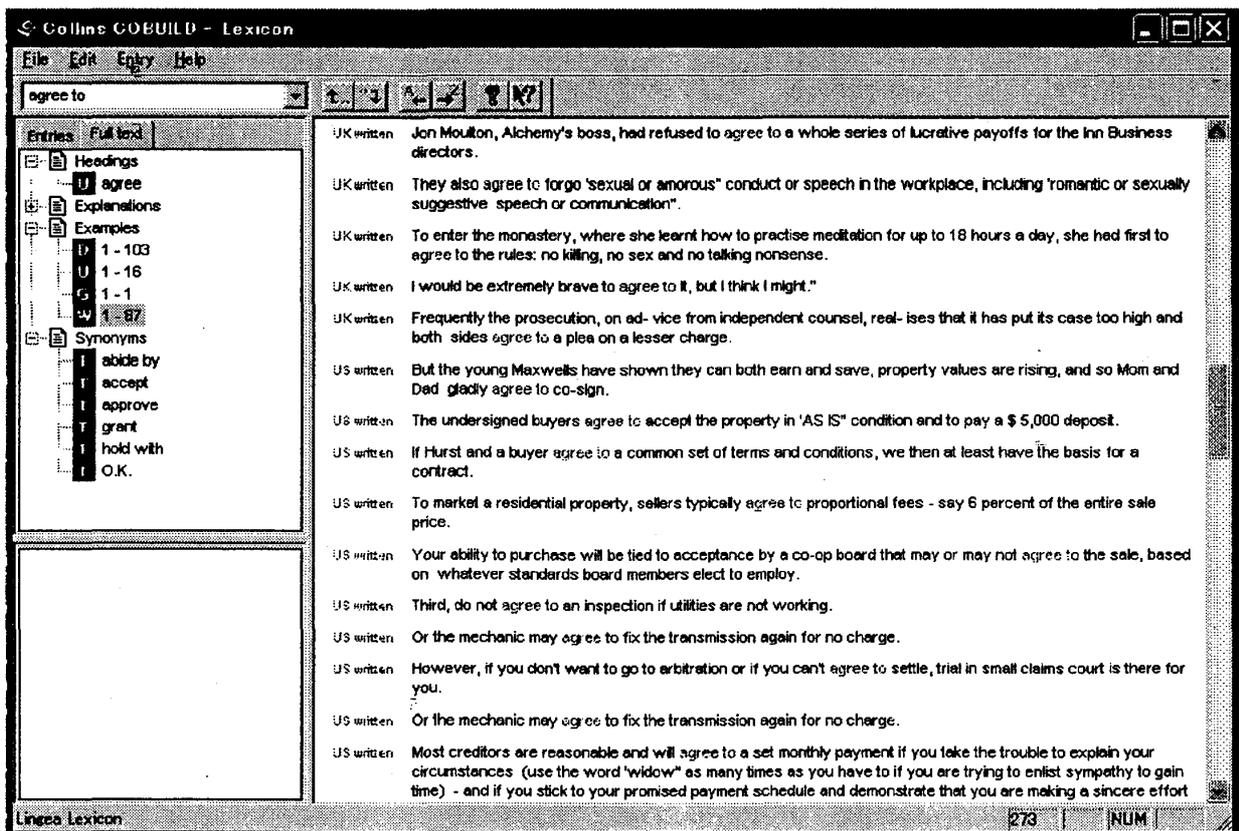


図 4

内訳を見ると、agree to に続くものは動詞の原形とそれ以外の事柄で区別できるようであった。

英文語では、動詞が続く例が 22 例、事柄が続く例が 16 例あった。事柄の内容を挙げておくと、my terms 2, one of the rules, the apartheid system, a clause, any changes 2, an appointment, talks, a higher excess, the publication, every move, a whole series of lucrative payoffs, the rules, it, a plea であった。

米文語では、動詞が続く例が 24 例、事柄が続く例が 11 例あった。内容は、the terms 4, proportional fees, the sale, an inspection, a set monthly payment schedule, a compromise, the statement, the rules であった。

英口語では、動詞が続く例が 1 例、事柄が続く例はなかった。

米口語では、動詞が続く例が 6 例、事柄が続く例が 6 例あった。内容は、something, who and how many, the deal, continuation, the mechanism, the terms であった。

つまり、agree with の後には人が続くことも多いが、事柄も続く、特に関係代名詞 what 節と指示代名詞 that が多い。また、アメリカ英語とイギリス英語の文語も口語も事柄が続くことがともに多い。ところが、agree to の後には動詞の原形が続くことが多いが、事柄も続く、特に terms が多く見られた。また、イギリス英語の口語では事柄が続くことはほとんどないと言える。

5. 考 察

コーパスを使うことで、ある英語の表現がどこでどのように使われるかが調べられることがわかった。これを使えば、書物に載っていないような、常に変化している言語に関する最新情報が手に入るのである。しかし、今回のコーパスにも欠点があった。それはコーパスのデータの年代がわからないことである。サンプルで見た The Bank of English の文や COBUILD on CD-ROM の文には年代が書かれていなかった。もしも 1990 年代の英語ばかりを集めてコーパスを作り、2000 年代の英語を集めて別のコーパスを作って、ある表現について比較してみれば、年代による言葉の変化がわかるかもしれない。今後は個人のレベルでデータを収集して独自のコーパスを作って英語の表現を研究してみたいと考えている。

参考文献

- 『ロイヤル英文法』 宮川幸久 綿貫陽 須貝猛敏 高松尚弘 1988 旺文社
『英文法解説』 江川泰一郎 1991 金子書房
『*Practical English Usage*』 Michael Swan 1995 Oxford University Press
「コンピュータを利用した英語研究と英語教育 インターネットとコーパスを活用して」
露木幸雄 ELTAT No.46 東京都高等学校英語教育研究会
『実践コーパス言語学』 鷹家秀史・須賀廣 1998 桐原ユニ